

<ネッシーのお薦め作品（焚書坑儒リスト）>

国内編 3 与謝蕪村 「蕪村句集」

皆さんお馴染みのもので入手容易です。蕪村が吐いたとされる十万八千のうち千首ちょっとを、蕪村自筆句帳を参考にしながら弟子達が編んだものです。おもしろいのは、自己採点による合格作品と我々が名句としている作品群とに大きなズレがあることです。

俳句とは何か、どうあるべきか、明治以降の大家によっても分かれるところですが、芭蕉、蕪村を第一級とするのには異論がないでしょう。小西甚一が、その著「俳句の世界」で短歌と俳句を「雅と俗」という言葉で対比していますが、顰みに倣って云わせてもらえば、青は之を藍よりとりて愛よりも青しといえるでしょう。逆説的に云えば、俳句はことばを切り詰めることによって短歌以上に生の実相に迫っているともいえます。小町の「花の色はうつりにけりないたづらに云々…」の長々しい詠嘆より、芭蕉の「この秋は何で年よる雲に鳥」や「齒にあてし衰いの身や海苔の砂」との咳払いの方が真実に近いでしょう。

正岡子規が、「歌よみに与ふる書」で皇室の御歌所の権威に真っ向勝負して「貫之は下手な歌詠みにて古今集は下らぬ集にて之れ有り候う」と言い切ったのは有名です。あのお歌嫌いなネッシー天皇なら「宮中に歌ほどうるさきものはなしコキン・コキンと朕も眠れず」と御詠みになったでしょう。

小林秀雄は難解な言辞で弟子や読者を「ハハハ恐れ入りました、大先生。！」と御老侯の印籠よろしく平伏させていました。短文「当麻」のなかで「美しい花がある。花の美しさなぞというものはない。」との名言を吐いていますが、別に難しいことを言ったわけではありません。個別の具体的な人や物を離れた抽象的な観念なぞ無きに等しいと言っているにすぎません。サルトルの「実存が本質に先立つ」と同内容です。カワイイ女の子は見たことがあるが、女の子のカワイイサなんぞには出会ったことがないと私の実経験をそのままいえば解り易いでしょう。古今・新古今調の和歌はこの「花の美しさ」だけを追求したものといえるでしょう。

かなり前に、桑原武夫なる文化人が「半素人でも百句に一句は、芭蕉や蕪村の佳句くらいは作れるのではないか（俳句第二芸術論）」と間抜けな発言をして小林秀雄に「ハ`カイツテンジャナイヨ、芭蕉や蕪村が達し得た俳諧の境地の深さと女子大生的頭の軽さを一緒にするな。」と一喝されましたが、さはいえ、かのマンチ（別にマンチでもウンチでも一向にかまわないのですが）の「この味がいいネと君が言ったから〇月〇日はサラタ`記念日」的境地と、関西小学生男子の「アンタいま屁こいたやろと君が言うたから〇月〇日は屁こき記念日」的境地とは大して差がないと思うのですが。子規がいま生きていたら、「マンチは下手な歌詠みにてサラタ`記念日は下らぬ集にて之れ有り候う」と言い切ったのではないのでしょうか。芭蕉でも蕪村でも、ひらがな文学だけでなく漢籍を深く読んでいて、例えば蕪村の「易水にねぶか流れる寒さかな」という句は司馬遷の「史記・刺客列伝」を知らなければ味わえないでしょう。

よく、芭蕉と蕪村とどちらが上かと訊く人がいますが、コ`ッホの絵とウ`ェラスケスの絵とどちらが優れているかというのと一緒で、優劣ではなく好き嫌いを問うべきでしょう。私は、鎌倉仏教でいえば、芭蕉は禅僧、蕪村は念仏僧とみているのですが。芭蕉の句「閑かさや岩に染みいる蝉の声」とか「田一枚植えて立ち去る柳かな」との句に「岩に染みいったのは、閑かさか、蝉の声か」とか「立ち去ったのは田植え人か、芭蕉自身か、いや、ひょっとして柳なのか」との禅問答を連想し、蕪村の名句「紅梅の落花燃ゆるん馬の糞」に「アリカ`タヤ、アリカ`タヤ」と糞を拝んでいる遊行僧の姿を見てもうのです。個人的には、「視線の低さ」という点で芭蕉より蕪村を好みます。

「骨ひろうひとに親しき堇かな」 「閑かさに耐えて水澄むたにしかな」 「石切りの鑿冷やしたる清水かな」
「斧入れて香におどろくや冬小立」 「貧しさに追いつかれけり今朝の秋」 「百姓の生きて働く暑さかな」



愚痴いえば唇寒し秋の風

@ネッシー 2012